

新1万円札肖像 渋沢栄一(号・青淵)の偉業の顕彰 蹴武の型 回し蹴りの型を青淵(せいえん)と命名した理由 信義を重んじる富国の担い手＝「実業家」像の普及 賤商観打破と論語資本主義・道徳経済同一説(義理兩善説) による啓蒙活動

河 明生(以下、筆者)が、日本跆拳道「蹴武の型・回し蹴りの型」に渋沢栄一の号・青淵を冠した理由は、大部分の報道機関が賞賛する500以上の経済機関や大企業の創業(東京商法会議所、東京証券取引所、一橋大学、みずほ銀行の前進・第一国立銀行、日本銀行等)にかかわったからではない。一を知って二を知らない主張である。



渋沢栄一

筆者は約24年前、聖徳以外の日本国最高貨幣の肖像画となった旧1万円札肖像の福沢諭吉と今後のデジタル通貨の普及発展に伴い最後の紙幣となるであろう新1万円札肖像の渋沢栄一による明治日本におけるビジネス啓蒙活動を比較検証し、単著及び共著の学術論文を発表している(下記「参考文献 河明生による渋沢栄一研究論文」参照)。



新 1 万円札

以下、上記論文内容を要約した筆者の最新論文（『日本跆拳道教本』ITA、2023 年所収）

河 明生著「青淵（SEIEN）回し蹴りの型 6 級水帯型

渋沢栄一の完結した人生から学ぶ「公益の経営」 蹴武の型・青淵、演武時の想起「信義の経営」
に加筆し、「蹴武の型・回し蹴りの型」を「青淵」と命名した理由を簡潔に明らかにする。

目 次

序

- 1, 渋沢栄一が欧州で学んだ「公益を重視する商人」像ー「ビジネス啓蒙の企業家活動」の端緒
 - 2, 新政府官僚への抜擢と退官後の決意ー「商人の品位を高め、商人は道德の模範になるべき！」
 - 3, 新生日本における資本主義発展を阻害した嘘八百の賤商観と主流だった個別経営主義
 - 4, 渋沢栄一によるビジネス啓蒙の企業家活動
 - 1) 旧大名や士族の心をつかんだ姿勢と論語資本主義
 - 2) 渋沢栄一流の論語資本主義、道德経済合一説（論語算盤説、義理両全説）と武士道的「実業家」像の普及
- 結 蹴武の型・青淵演武時、渋沢栄一の人生観＝「信義の経営」を想起し人生訓とすべき！

序

19 世紀は弱肉強食の帝国主義時代である。当時、日本は維新によってかろうじて欧米列強による侵略と植民地化を回避し（当時、英国首脳には幕末日本の内乱に乗じて九州または四国を武力で奪う計画があった、とする公文書が英国に残っている）、明治という新しい時代を迎えた。

新政府は欧米列強から多額の借金をしながら各種欧米流資本主義制度を移植し、富国を目指した。

しかし、優れた資本主義諸制度を移植したとしても、その担い手たる経営者が私利私欲の強欲な輩であったなら日本の植民地化は免れなかったであろう。やはり富国という公益を重視する経営者の存在が不可欠であったと考える。

この現実にはやく気付いたのが渋沢栄一であった。のみならず渋沢は、率先して愛国的経営者を育てるためのビジネス啓蒙活動の企業家活動へと身を投じたのである。

1, 渋沢栄一が欧州で学んだ「公益を重視する商人」像ー「ビジネス啓蒙の企業家活動」の端緒

将軍・徳川慶喜は、薩長反幕府勢力が英国との関係を強化したため、対抗上、フランスとの関係を強化した。1867年、慶喜は実弟・徳川昭武を団長とする徳川幕府使節団をフランスへ派遣した。その際、経済的資質の高い渋沢を会計係として抜擢し随行員に選んだ。

約2年間、欧州に滞在した渋沢は、昭武の世話人、フランス人の銀行家フラリ・ヘラルドから、金融、産業、流通等の近代資本主義制度を学んだ。そのうち渋沢が最も感心したのは、不特定多数から少額の資金を集めて大資本と成し、大規模な事業を起こして収益が出れば株主に還元するという「総資本主義」的な株式会社制度であった。

彼はこれを「合本主義」と名付け、帰国後、東京株式取引所創設等、新生日本における株式会社制度の普及に尽力することとなる。

渋沢は欧州における商人の国家社会的地位の高さに驚き感動した。ヘラルドが日本なら武士に相当する仏国陸軍大佐ベレットと対等に接していたからである。土農工商からなる士尊商卑の日本ではあり得ない光景だった。彼が10代の頃、岡部藩代官から500両という大金を巻き上げられ、身分が低いという理由で侮辱された屈辱が忘れられなかったから、衝撃的な光景だったに違いない。

渋沢は、日本で蔑まれる商人と欧州で尊重される銀行家との異同は何かを考えた。

渋沢は著書『航西日記』で「西洋人は事業を起こす際、公益を考えている」と記している。

渋沢は新生日本にはヘラルドのような公益を考える経営者が必要だと確信した。

この確信が渋沢の人生の進路を方向づけたといっても過言ではない。

やがて彼は自己の人生規範としている儒教・論語と欧州で学んだ資本主義システムを止揚し「論語資本主義」を主張しながら「ビジネス啓蒙の企業家活動」を推進することとなる。

2, 新政府官僚への抜擢と退官後の決意ー「商人の品位を高め、商人は道德の模範になるべき！」

渋沢は、徳川幕府最後の将軍となった旧主君・徳川慶喜を助けるためヨーロッパで学んだ新知識を応用し、経済的才能を発揮した。静岡藩で日本初の株式会社・商法会所を創設し静岡藩の財政を潤し立て直した。

静岡藩での実績が新政府、とりわけ大隈重信（後、総理大臣）から注目された。薩長閥が主流だった新政府には勇猛な軍人は多かったが行政手腕に秀でた者が少なかった。ゆえに維新に功の無かった大隈重信や江藤新平等が抜擢され、旧幕府の人材を採用したのだから人材が足りなかった。そこで大隈は渋沢をスカウトした。徳川慶喜も勧めたので民部省（大蔵省）に入省し、租税正（主計局長）となって辣腕を振るい大蔵省 NO2 の少輔事務取扱（次官）に出世した。「銀行法規」「国立銀行条例」等を立案し「日本銀行生みの親」と評価を得ている。

しかし、健全財政主義による予算削減を主張したため他省、とりわけ薩長中心の軍部と対立し大蔵省を退官した。当時は非常な官尊民卑であり、高級官吏の地位が高く、大臣や参議は人間以上の存在と思われていた。ゆえに渋沢の上司や同僚は慰留し、高級官吏の地位を捨てる愚かさを諭した。しかし、渋沢は毅然と答えた。

「国家の基礎は商工業にある（略）日本に必要なのは商人の品位を高め有為な人材を商業に向かわしめその社会的地位を高めることにある。商人は道德の模範になるべきである（略）」

『論語』をもって商業を経営する姿をあなた達にみせたい」と起業家精神を公表した（河,2001,89p）。

3, 新生日本における資本主義発展を阻害した嘘八百の賤商（せんしょう）観と主流だった個別経営主義

新しい時代には新しい人材が必要である。新生日本で期待された新しい人材の供給源は旧士族であった。しかし、官吏や軍人を目指しても経済人を目指そうとはしなかった。また、経済人には私利私欲の輩が多く、公益を目指そうとする人材が少なかった。

①賤商観

渋沢は、徳川時代の士農工商という封建的身分制度によって日本人にしみついていた賤商観の打破を欲した。富国強兵を目指した新政府は、若き旧士族出身者から富国に貢献する人材が輩出されることを期待したが期待外れとなった。旧士族達には賤商観が根強かったからである。

江戸時代から幕末迄、「商人（アキンド）」が低い職業倫理をもち不正な商売を行っていた。

「商人」達は、「嘘も元手の内」、「商人は嘘で固まる」、「商人の嘘は神もお許し」等を信条とし、「商人」はウソを上手につけないと儲けることができないと信じていた。彼らは武士に対してへつらい土下座は当たり前であった。ゆえに若い旧士族達は「商人」を軽蔑し、たとえ官吏や軍人になれなくても「商人」には成りたくないと経済界への進出をためらっていたのだ。

②個別経営主義

私利私欲の拝金主義や優秀な社長及びその一族だけが経済的利益を独占すべきとする個別経営主義が蔓延した明治という時代に、渋沢は毅然と立ち向かいこれを批判した。

明治初期には株式会社制度は普及しなかった。当時は一人か少数の者が大規模な事業を起こし、成功した暁には彼らが富を独占すべきであるという「個別資本主義」が主流であった。その権化が三菱創業者の岩崎弥太郎だった。岩崎によれば、大事業は才能ある者が独裁的に運営しなければ成功しないのだから専制経営者が富を独占するのは当然の帰結である。皆が金を出し合って皆で豊かになることを理想とする総資本主義（株式会社制度）を理想とした渋沢は、三菱創業者・岩崎弥太郎等の個別経営主義と対決しなければならなかった。

（渋沢は個別経営主義の権化・岩崎弥太郎と対立し、船舶事業を独占する三菱に対し新会社を起こして挑戦した。両社共倒れの危機に直面した際、岩崎が急死して和解。両社を合併し日本郵船が誕生している）

4、渋沢栄一によるビジネス啓蒙の企業家活動

優れた資本主義諸制度や巨大企業があったとしても、その担い手たる経営者が、公益を軽んじ私利私欲の強欲な輩であったなら、中流層が幸せになれるという意味で「修正資本主義」と呼ばれる現代日本はなかったに違いない。やはり新生日本には、公益を重視する経営者の存在が不可欠であった。

渋沢は、新しい時代にふさわしい経営者像、信義を重んじる富国の担い手＝「実業家」像を主導した。

江戸時代には無かった「実業家」像は、渋沢によるビジネス啓蒙活動によって普及されたといっても過言ではない。

つまり実業家という概念を実質的に創造したのは渋沢栄一だったのだ。

渋沢は「論語資本主義・道徳経済同一説」を主張し、経済的信義の尊さを啓蒙し、それを自ら実践し模範を示した。

1) 旧大名や士族の心をつかんだ姿勢と論語資本主義

徳川幕藩時代の高級公家や大名等の支配階層からすれば、維新は下級公家（たとえば、岩倉具視）や下級武士（たとえば、西郷隆盛、大久保利通、桂小五郎、伊藤博文等）による下克上であったし、「世が変わった！」と傲岸不遜な態度で旧上司層に接する者も多かった。

しかし、渋沢は世が代わって出世し、旧主君・徳川慶喜よりも地位が向上したにもかかわらず臣下の礼を終生堅持した。この律儀な姿勢が旧支配層から信頼された。とりわけ毛利家、前田家、蜂須賀家等の旧大藩の藩主や土地を有する上級武士たちから信頼され、彼らから新規の事業に対する多額の出資を申し込まれたのだ。

この史実を我々は学ばなければならない。

また渋沢は、新しい時代に求められる新しい経済道徳を大名や士族が必須の教養として慣れ親しんでいた儒教を基底に啓蒙（後述）した。

「封建制は親の敵でござる！」と旧支配層を罵り、ベンサム流の功利主義を説いた福沢諭吉とは対照的に多くの旧支配層から支持者を得たことも見過ごせない。

富国を目指さなければならなかった明治と言う新たな時代に、福沢は理論、渋沢は実践でビジネス啓蒙の企業家活動を推進したが、資産を有する旧支配層の多くは福沢を嫌い渋沢を好み事業資金を渋沢本人あるいは渋沢が推薦し

た起業家に提供したのだ。500 を超える経済団体や企業創立に渋沢がかかわり、論語資本主義の異名を得た所以である。

2) 渋沢栄一流の論語資本主義、道德経済合一説（論語算盤説、義理両全説）と武士道的「実業家」像の普及

第一国立銀行頭取に就任した渋沢は、会合や講演等で『論語』を置きながら「道德経済合一説」を力説した。

渋沢は旧士族が慣れ親しんだ孔子の言葉を引用しながら力説した。

孔子によれば「民を富まして後に教えん」＝民を富ませることが君子の任務である。

「君子は義に論り小人は利に論る」が「不義にして富み且つ貴きは我に於て浮雲の如し」であり

「利に依って行えば恨み多し」と論している。

国家の隆盛は新たな商工業を興し科学技術を発展させながら富を国にもたらしてこそ可能となる。

その発展は『論語』の信義の道理に基づく合本主義（株式会社制度）によらなければならない、

と独自の儒教解釈論を主張した（河,2001,90-91p）。

また渋沢は「武士道は実業道である！」と言い切った。

武士道の真髄は、正義、廉直、義挙、礼讓などの美風を加味したものであるが、その内容は道德である。

孔子によれば、

「富と貴とは是人の欲する所なり。されどその道を以てせずして之を得ればおらざるなり。

貧と賤とは是れ人の惡む所なり。されどその道を以てせずして之を得るも去らざるなり」

は、武士道の美風に適合する。

賢者が貧賤に処してその道を変えぬと言うのは、武士が戦場で敵に後ろを見せぬという覚悟と似ている。

不正で富を得たとしても後ろめたいのは、武士が戦によらなければ領地を得ることを潔しとしない心意気と同じだ

とし、文明国における商工業者は、一度約束したことは損得があろうがなかろうが必ず守るという武士道をもたなければならないと力説した。

この「士魂商才」の精神をもつ新しい身分こそが「実業家」であると主張した（河,2001,91-93p）。

確かに渋沢の主張は理想論だった。

だが、この愛国的経済主体理想論を公で批判することは誰もできなかった。

むしろ多くの経営者が自分を実業家に近づけようと努力した意義は大きい。

また自己を「実業家である」と好んで自称した。

とりわけビジネスの世界に身を投じた旧士族達は、実業家という呼称を好んで使うようになった。

彼らが軽蔑してきた「商人」ではなく、富国のために一身を投じる実業家という新しい身分は、先祖代々承継してきた誇りと自尊心を満たしたからである。

結 蹴武の型・青淵演武時、渋澤栄一の人生観＝「信義の経営」を想起し人生訓とすべき！

渋沢の卓越した経営能力、元主君に対する報恩、公益志向、総資本主義、民業優先と論語資本主義等は財界において唯一無二の絶大なる信用となった。

新規事業を起こす際、誰もが渋沢に相談し指導を仰いだ。

その結果が 500 に上る公的経済機関や企業の創立である。東京株式取引所や東京手形交換所等公的経済機関 24 団体、第一国立銀行（現みずほ銀行）や日本銀行等金融 38 社、日本郵船や日本鉄道（現 J R）等運輸 61 社、鐘淵紡績等繊維 15 社、王子製紙等化学 35 社、日本鋼管等鉄鋼 8 社、札幌麦酒等食品 11 社、東京ガスや東京電力等電気ガス 14 社、帝国ホテル等 3 社、専門経営者を育てる教育機関・一橋大学等々である。

このような業績から渋沢は「日本資本主義の父」と尊称されるのである。

しかし、優れた資本主義諸制度や巨大企業がかったとしても、その担い手たる経営者が私利私欲の強欲な輩であったなら、「修正資本主義」と呼ばれる現代日本はなかったに相違ない。やはり公益を重視する経営者の存在が不可欠であったと考える。その時代の要請に答えたのが渋沢栄一であった。

蹴武型・青淵は、19 世紀後半の新生日本の混乱期に「経済的信義」を主張しながら自ら範を示した渋沢栄一の人生を顕彰し、彼の完結した人生から「経済的信義を学ぶために創始した型」である。

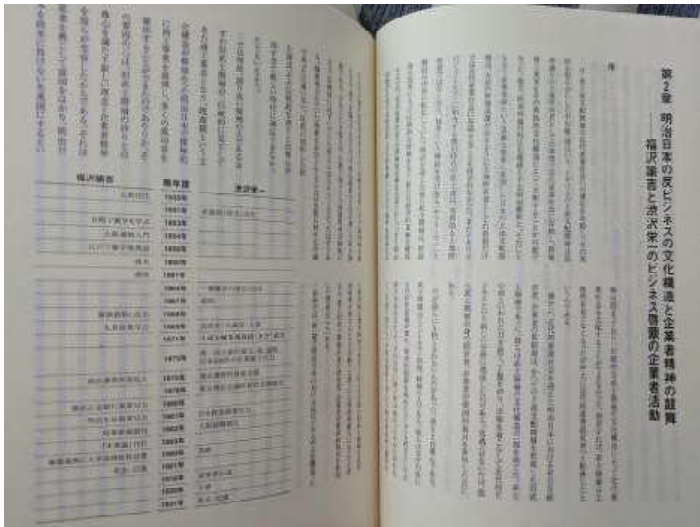
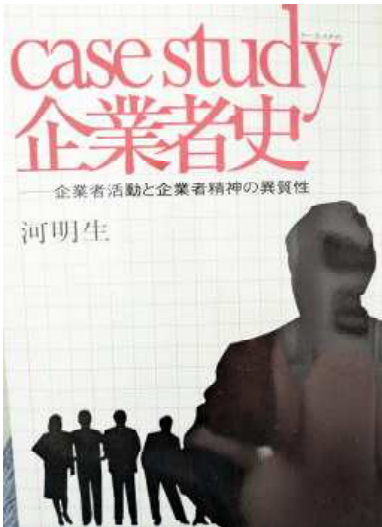
不義不正が横行している現代の経営。資本主義社会では金を得ることは重要であるが、手段は選ぶべきである。我が門人は青淵を演武する際、渋沢栄一の人生観＝「信義の経営」を想起し人生訓とすべきである。

渋沢栄一の参考文献（発表年度順）

渋沢栄一『論語と算盤』（初出 1927 年）大和出版（解説 草柳大蔵）、1992 年
渋沢栄一伝記資料刊行会編『渋沢栄一伝記資料』1955 - 1971 年
土屋喬雄『渋沢栄一伝』東洋書館、1955 年
J・ヒルシュマイア（土屋喬雄、由井常彦訳）『日本における企業家精神の生成』東洋経済新聞社、1965 年
土屋喬雄『続日本経営理念史 明治・大正・昭和の経営理念』日本経済新聞社、1967 年
渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一事業別年譜全』1985 年
藤井賢三郎『評伝 渋沢栄一』水曜社、1992 年
島田昌和「産業の創出者・出資者・供給者 渋沢栄一・渋沢家財務資料を中心に」
『ケースブック日本の企業家活動④企業家の群像と時代の息吹』所収、有斐閣、1998 年
渋沢研究会『公益の追求者 渋沢栄一』山川出版社、1999 年

河 明生による渋沢栄一研究論文（発表年度順）

河 明生『Case Study 企業家史ー企業者活動と企業者精神の異質性』アートン、2001 年所収
「明治日本の反ビジネスの文化構造と企業者精神の鼓舞ー福沢諭吉と渋沢栄一のビジネス啓蒙の企業者活動の比較」



河 明生著「ビジネス啓蒙の企業者活動 福沢諭吉の西洋経済合理主義によるビジネス啓蒙の企業家活動と 渋沢栄一の東洋修正儒教によるビジネス啓蒙の企業家活動」

（共著、法政大学産業情報センター編『ケース・スタディ 日本の企業家史（2002 年、文眞堂）』所収）



河 明生著『日本跆拳道教本』ITA、2023 年所収
「青淵（SEIEN）回し蹴りの型 6 級水帯型
渋沢栄一の完結した人生から学ぶ「公益の経営」 蹴武の型・青淵、演武時の想起「信義の経営」



渋沢栄一 略年譜	
1840	出生(武蔵国・埼玉県深谷市)
1844	尾高惇忠から論語等の儒学を学び始める
1854	単身、藍葉仕入れ等の始める
1856	岡部藩代官から生涯忘れられる屈辱を受ける
1863	挙兵計画が幕府に漏れ京へ逃げる 平岡円四郎、一橋家家臣に推挙 経済的手腕を発揮し一橋家財政を助ける
1866	徳川慶喜、第 15 代将軍就任し幕臣となる 慶喜、仏万国博覧会に派遣する弟徳川昭武 を財政的に支える御勘定格陸軍付調役任命
1867	欧州各国訪問過程で近代資本主義を学ぶ
1868	徳川幕府消滅、新政府樹立に伴い年末帰国
1869	徳川慶喜の恩に報いるため静岡藩財政基盤 確立に尽力。仏で学んだ株式会社設立等、 日本初の資本主義機関設立し新政府が注目 慶喜から説得され官僚・民部省租税正就任 国立銀行条例制定に手腕を発揮する
1871	大蔵省大蔵権大丞就任
1873	予算編成で大久保利通と対立し大蔵省退官 第一国立銀行（現みずほ銀行）総監就任
1875	「商人(アキト)」とは異なる実業家には学問と 教養が不可欠と考え東京商科大学（一橋大学） 等、経済商業系大学の創設に尽力する
1878	東京商法会議所（現日本商工会議所）創立 合本主義実践のため東京株式取引所創立
1909	引退表明。約 500 の経済機関や企業設立に 係わり「日本資本主義の父」と尊称される
1931	11.11 逝去 享年 91